巻頭言

# 病院図書室　雑感

神戸市立医療センター中央市民病院 病院長　坂田　隆造

このたび巻頭言の依頼があり、本当に久しぶりに病院図書館の存在が脳裏に蘇った。いつ頃から縁がなくなったかと記憶をたどっていくうち糸にまつわるように懐かしい思い出が次々と呼び起こされ、過去を振り返ることの少なかった日々の中に感傷の一服茶が温まって、もうそういう年なのかもしれないと甘受した。

病院勤務の連続で、確か20世紀末までは病院図書室のお世話になっていたようである。主な目的は文献の収集で、読了論文の参考文献で気になるものをメモし、それを図書係の事務員（病歴室と同じ部屋で、病歴係の○○さんと呼んでいた）に収集してもらうことであった。もちろん図書室にはある程度の医学雑誌は揃えてあったので、多くは自分で探し当てそれをまとめてコピーするのであるが、私の専門の循環器・心臓血管外科関係では4割ぐらいは外部から取り寄せる必要があり、事務員に依頼することになる。事務員の依頼先が近所の大学医学部図書館なら2〜3日で揃うが、国会図書館ともなると1カ月程度は優にかかって論文作成や学会準備は大幅におくれることとなった。もう一つの目的は、論文や医学書の勉強、あるいは学会の準備などのデスクワークのための図書室利用であった。当時の勤務病院は部長個室などもってのほか、医者は診療の現場で一日を過ごすものであり医師には平机とロッカー一つあれば十分という雰囲気であった。平机の上はカルテと医学書でごみの山の様相を呈してじっくりものを読めるような状況ではなく、勉強の時は図書室に行く他なかったのである。

21世紀初頭から大学勤務となった。大学には医学部図書館があるので附属病院には図書館（室）は無い。つまり図書館までの距離が遠ざかる。別の敷地、ないし別棟となり戸外を歩かなくてはならない。一方、教室には教室の図書室があり、教授室から電話すると秘書が御用伺いに来て、依頼論文がお茶と共に運ばれてくる。教室の図書室にない場合も医学部図書館に電話で確認してくれて、あれば図書館まですぐ走り、無いときは外部に依頼してその旨報告が届く。つまり図書館に出向く必要はなかったのだ。私はその大学に9年半在籍したが、いくら記憶をたどってみても図書館がどこにあったか今もって思い出せない。しかしある雨の日、傘をさして図書館に行き受付の前を通り抜けた記憶は奇妙にはっきりと残っており、玄関が建物の西側にあったのも覚えている。一方記憶の中の医学部・附属病院を俯瞰するとき私が訪れたはずの図書館の位置は南に向かって開けた中庭で、図書館らしき建物は無いのである。さても怪しきことかな！ と湯飲み茶わんを手に取り、空になっているのに気づいて記憶の波に揺蕩いつつ状況はウイスキーが相応しいとグラスに注ぐ。

この間、いつごろからかインターネットで文献検索ができるようになり、教室の図書室も経費削減の意味もあって購入医学誌の種類も厳選されるようになった。厳選の基準は愛読者が多いというより伝統ある権威雑誌を揃えて後世に残すという漠然とした大学人の思いであったよ

さかた　りゅうぞう

うに記憶する。新刊誌が届けられると私の部屋に届けられ、一通り目次に目を通して面白そうな論文は読みあとは図書室に並べられるのであるが、新刊誌が届けばとりあえず手に取って、というような医局員はあまりいなかったように思う。紙媒体のページを漫然と繰って論文を通覧するより、必要文献はインターネットで検索し、医局秘書にコピーを依頼するスタイルがいつの間にかすっかり定着してしまっていたのだろう。

2008年に次の大学に異動した。母校であったので医学部構内にある図書館の場所はよく覚えており、今もそれは同じところに昔の姿のまま佇んでいる。学生時代はいろんな目的でよくもぐりこんでいたので前を通る度に当時をふと思い出すことはあったが、30年の郷愁に誘われて玄関の扉を開けることは遂になかった。インターネットによる文献検索はますます便利に、ますます安価に、そして多くは無料になっていき訪れる要件がなかったのである。

2015年4月から現在の病院に勤務するようになった。しかし上述のようなありさまで病院図書室の場所、いやそもそも病院図書室の存在さえもが意識に上ることは無かった。今回の依頼がきっかけで初めて病院図書を確認したところ、院長職にあるものとして全くもって情けなく申し訳ないことであったが、当院には立派な図書室があったのである。管理区域の静かな一角に広さ261 $m^2$、検索用PC6台が備え付けられた明るい図書室である。それにしても文献検索などはどこでもいつでもできる今の時代に、誰が何の目的でどのように図書室で過ごしているのかと気になって調べてみると、なんと年間2万人を超える利用者があるとのことであった。職種別の利用状況は医師と看護師が各4割、その他の職種などが2割である。医師・看護師以外の職員は日勤帯はほとんど仕事に従事しているので、その他の2割はどういうものなのか尋ねてみた。当院には各種大学からの実習生が入れ代わり立ち代わり実習に来ており、医学生をはじめ各方面からの見学者も年間を通して多い。これらの人が実習の合間や待ち時間の有効利用目的で自習の場として図書室をよく利用しているとのことであった。

職員は主に文献検索や学会発表、論文発表の作業の場として利用しているようである。図書室では、現在154種の英文医学雑誌と81種の和雑誌が定期購入されている。新着の雑誌は壁面の書架に整然と並べられ、ある程度の部数が重なるとまとめて奥まった別室の書庫（ここもかなりの広さがある）に保管されていて、当然のことながら随時閲覧は可能である。

病院では大勢の多職種職員が働いている。それぞれのチームの課題解決のため、自己能力を高めるため、あるいは診療の成果を公にするために忙しい勤務の合間を縫って図書室を利用している。研修医や実習生たちも寸暇を惜しんで図書室で自習に励んでいる。

このような人々こそが病院を支え医療を支えているのだとわが身の不明を恥じて感謝である。